

東京日々新聞

千三十六号



月影暗くあ戸
 集め走て耻と更科や田毎の
 森干やら有明山の鏡
 所の姥捨山と思ひ
 桐原おき去よ幾らの山の
 隠山をうりう松の
 木蔭に休息て
 コノ犬主引き
 て善光寺もくや近
 付と岨岨も名無草野やふつららん
 大い苦勞とせせやと云ふお犬の立
 上り「抑や爺様と逢そめ川の
 手鼻らむえ恥ぢさせ些とんをわ
 筑ナ川と膝で脊中をつくま川。

戲記
 持病の癩は非かして突い俄に
 轉倒と卒中風あて臥腦む
 老氣の至りの道行の河原奇座の
 淨瑠璃よのさうり似く非る珍説あり

轉々堂主人

戲記



信州飯田松尾町に駿も長て七十のこど九ウ腰まの二重も成
 ちのちの輪懸職の甚助が近所に住めるお犬とて六拾七の老嫗と
 私通するると甚助の女房へ六十
 五才あて良人の名を以て
 嫉妬ふれば

一蕙齋
 芳後

八形
 吳足座
 ホク米